

とら いち 虎市

神野麻郎

三月中旬に八年ぶりくらいで笹島ささじまに帰郷して旧友や親族に会い、またなつかしさのままに島の各所をめぐるみてみた。温暖な島ではもう梅の花が盛りを過ぎ、神社の参道の桜のつぼみがふくらんでいた。東側の断崖、カベヘラの下したの洞穴は、うねりが寄せると変わらず豪快に地鳴りをさせて潮を吹き上げていた。本島北端の山にある観音堂にも詣でた。観音堂までの、崖の上を長々とたどる山道からは、春らしく青さの増した海原の向こうに、昔と同じく紀州の山並みがかすんでいるのをながめた。

帰郷するたび、ますます疎そに、また小奇麗せうれいになっていく島を感じる。島ではここ数十年、過疎化と現代化が同時に進行している。車道というものがなかったので相変わらず車は一台も走らないが、今や島にかつてのような水と電気の不安はもうない。港は大きく拡張されて高い防波堤でよろわれ、瀬戸をはさむ前島とも橋でつながった。漁師は漁場に居ながらにして携帯電話で家族と連絡し合っている。ネット環境も改善され、島にいても瞬時に世界のこと
は知られる。

小型漁船はだいぶ前から強化プラスチック船に変わり、高性能のディーゼルエンジンを搭載し、波の上を飛ぶように走る。漁船でも連絡船でも、航走わずか半時間ほどで四国本土の最寄りの港にも行けるようになったので、本土の港近くに車庫を借りて車を持つたり家を借りたりして休日を楽しむ漁師の家族もある。島内には漁家とも見えないカラフルな家も建つようになった。こうした環境や生活の変化が、島びとたちの意識も変えていくのは当然だろう。私が子供時代に経験したような、年中狭い島に閉じこめられて暮しているという感覚は薄れ、密集した家々から声や物音がこぼれ、時に男女の怒声や酔漢のわめきも混じり、狭い路地を大勢の子供たちが走り回り、井戸端は水汲みや洗濯の女たちでにぎわっているというような濃密さ、猥雑さも、もう島にはない。

当所神社に上る階段のわきの、山際のやや小高い所にある藤村ふじむらの家うちに寄る。左に曲がる階段を上ると小道の左側は長々と石垣が続き、右手に朽ちかけた納屋がままずある。母屋は山のへのりへのりの細長い敷地に立っている。山側は高い石垣が山の斜面を抑え、南側は低い石垣の向こうに視界が明るく開けている。長年ここで独居していた母方の祖母がかなりの高齢になってこの家を離れてから、もう二十年もが経つ。私は島に暮していた子供時代、祖母や従兄妹たちが起居していたこの家に親しみ、よく寝泊りもしたので、半分自分の家のように思っていた。それに、田の字型の間取りの小家が多い島の中では大きな構えで、また小高い地所に一つ離れて立つからか、あるいは祖母たちが神仏を敬虔に祀りながらいつも清潔に住みながら
していたからか、他家に比べるとこの藤村の家は何か特別な感じがしていた。

無人になって久しい家屋はまだしつかりと立ってはいるが、縁者がようすを見に来ることもまれになって、屋根は瓦がゆるみ、ところどころ苔を生やしている。風雨に洗われる壁の羽目板は色あせ、細長い前庭ではセメントの割れ目から雑草が伸びて立ち枯れている。一階の軒裏には櫓や竿が寝かせて収納され、かつて漁家だったなごりを見せているが、それらはもう半世紀以上も使われたことがないので白っぽく乾いている。

鍵もかけていない玄関の雨戸を繰ってみるとがたがたと開いた。他の雨戸と障子戸も二三枚繰って光を入れながら、玄関の土間に踏み入ってみる。私にはよく訪れた幼いころの感覚がまだ残っていて、この土間はこんなにも狭かったかとあらためて驚く。うすくすえたにおいがして、畳にも屋根裏部屋に上がるはしご段にも白い粉のようなほこりが散っている。

島でエンと呼ぶ上り框から、八畳ほどのアガリタテの間になると、船材を流用したという天井に横たう太い黒塗りの梁は昔に変わらないが、古いクモの巣がかかっている。南面する作り付けの、祖母が朝ごと夕ごとに欠かさず祀っていた仏壇は障子で閉じられ、くすんでいる。その部屋から右手の四畳半はカツテの間で、水屋や食卓は以前のままの位置にある。晩年の祖母がそこでもいつも起居し、座椅子に腰かけ、食事をとり、テレビを見、居眠りをしていた。次には狭い板間、それに寺の庫裡のような広い土間が続く。土間には小さな天窓からの明かりもさして、水場のほか、まだ取り払われずにある陶製の水甕や土製の竈や粗朶置き場が浮かびあがる。板間と土間を合わせた空間を島ではダイドコと呼ぶ。脳の記憶は勝手に、そのダイドコのうすぼこりの舞う小暗さのなかに、かつてそこで立居していた祖母や祖母の一家の人々の姿や、餅つきの光景や、子供だった自分の姿をちらちらと呼び起こし、音もない人声をよみがえらせる。

アガリタテの間の奥は、十二畳もあるオモテの間だが、その仕切りの襖には山水風の絵が描かれている。わざわざ本土の絵師を呼んで描いてもらったものだと思っていたが、子供心には不思議な絵柄で、でも何か心惹かれた。この広いオモテの間で、夏は蚊帳を吊ったりしてよく寝泊りしたのだった。しかしもう、裏山に近い側は湿気にやられて根太がゆるみ、畳も外されている。正面に切られた大きな床の間がこの部屋の目立つ部分だが、その祭壇は今も空虚だ。また以前は、その床の間の左手の鴨居に、大小の写真の額が四つ、五つと掛かっていた。いずれも変色した白黒の肖像写真だったが、神主姿の人と、兵隊帽をかぶった若者と、着物姿のおばあさんが写っていたことを覚えている。額の中のどの人も、昔の写真らしくなりを正し、正面を向いて生まじめな表情をしていた。

もう一つある部屋はオクの間で、アガリタテの間の裏側にある。山側で日当たりもなく陰気な部屋だが、夫婦の寝室で、時に産室ともなる。私自身もそうだが、昔、島の子供は皆家々のこのオクの間で呱呱の声を上げた。藤村に嫁いできた代々の嫁は皆、幾度となく、この部屋で脂汗を流しながら子供たちを産みあげたのだ。

一階をそうして一巡りした後、玄関の雨戸を閉じて前庭に出た。腰ほどの高さの石垣越しに、光降る南方をまぶしく眺める。集密する家々の屋根の向こうに前島が居坐り、頂きの平

らな、跳び箱のような姿は昔に変わらぬ。この風景を、子供のころ何度絵に描いてみたことだろう。集落の上を渡る風がやや激しい。

玄関の上り口の丸い踏み石は、まん中が磨り減ってやや凹んでいる。そのやや高い石を、幼いころは足を振り上げて上った。そこに腰かけると、石垣の下あたりに春の日がおだやかにたまっていった。そうしてしばらくたたずんでいると、ふと時が溶けていった。死者と生者があいまいになり、またざわざわとけはいはするが音のない声に取り巻かれた。その中には子供の自分の声も混じっているようで、あれからの自身の長い流離も思われた。そのうち島が自分を大きく包みこみ、慰めてくれるような感じに襲われ、涙がこぼれた。

学生のころ、自分の生地であり、父祖の郷里でもある笹島に興味をもった私は、夏休みなどにいささか民俗採集者気取りで、そのころまだ存命していた二人の祖母から笹島についてのあれこれを聴きながら、録音やメモを取ったことがある。当時父方の祖母はもう八十代なかばで、笹島からの連絡船が着く港の近くにある父母の家、つまり私の実家に老いの身を寄せていた。そのころは父母ともにその市の役所に勤めていた。母方の祖母の方はまだ七十を越えたばかりで、笹島の藤村の家に独居していた。二人の祖母から昔の笹島のことや自身の人生についてあれこれ聴くうちに、親族関係についても少しずつわかってきたので、それを簡単な系図に描いた。といっても、手近にあった用済みのカレンダーの白い裏面に、メモをもとにタテヨコの線を引きながら書き込んだだけのことで、いかにも暇な学生らしいすさび書きにすぎなかった。しかし、祖母たちの語る昔の笹島に生き死にした父祖たちの人生には驚くようなこともあり、影絵の劇を見るように漠然と興味を惹かれた。

たとえば父方に「黒市」と呼ばれた男がいた。大柄ではなかったが筋骨隆々としていた。香兵衛で気が荒くよく派手な喧嘩もしたが、腕よく胆太い漁師で、島の近くにクジラが寄せてきた時には勇敢にも船からクジラの背に飛び移ってモリを刺して仕留めたのだという。

市蔵という名だったが、色が一等黒かったので「黒市」と呼ばれた。そう聞いて以来、黒市のことを思うと、頭に昔の笹島の海の勇壮な漁の景色が広がった。取り囲む船、のたうつくシラ、そのたてる白波、そして禪一丁でクジラの背に乗って太いモリを打ち込む黒市。その荒々しく果敢な海人の血が自分にも流れているのだと思うと愉快で、鼓舞される気がした。

だが、父祖たちについての話の中でもっとも印象に残ったのは、黒市のように豪快、奔放ではないが、母方の「虎市」のことだった。やはり漁師だったが、晩年、笹島の観音山の通夜堂で十八年間も堂守をして暮し、そこで生涯を終えたという。祖母が藤村の家に嫁いでいたころ、虎市はもう自宅ではなく、集落からは遠く離れた観音山に一人で住んでおり、若い祖母は時々山越えして通夜堂まで豆腐や味噌や味噌を運んだそうだった。虎市は不便な中で自活しながら、通夜堂内外の清掃や参詣の人たちの世話をわが仕事とした。よく境内の一隅で藁を打ち、縄や草履を編み、できあがった藁草履は「これやるわー。持っていねー」と気軽に声をかけて参拝の人たちに与えていたそうだった。また人に、「魚は食え、精進はせえ」というのが口癖だったという。

通夜堂は集落から山道を歩いて一時間ばかり、観音山のふもとにある。山頂には松林寺の奥の院の小さなお堂があつて、平安の昔空也上人が梅檀木くわんやに乗って来島し、その木の一部で刻んだという十一面観音を祀り、古来島びとの篤い信仰を集めている。島びとは親しみをこめて山上にある奥の院を「上のお観音さん」、ふもとにある通夜堂を「下のお観音さん」と呼ぶこともある。

信者たちの寄進になる大きな瓦屋根の通夜堂は、祭壇に歓喜天や不動明王の像を祀り、二十畳くらいの広さがある。電気は今でも通じていないが、多少の煮炊きの設備が付属し、布団類も準備され、名のおり以前はよく島びとや島外から参詣に来た人々が宿泊したという。夏休みにだったか、私も担任の先生や同級生十数人と遠足気分でそこに泊まり、周囲の木立の闇の中でお化けごっこなどして騒いだこともある。お堂の前の境内は四角い広場になつていて、二月十八日の観音の祭礼日には島の老若男女が集い、以前は店も出、餅投げなどもやつてにぎわつた。広場への入り口は桜並木で、そばに便所もあり、やや離れて井戸も一つある。

観音山のふもと一帯には葦を生やした野尾辺のおべの湿地が広がっている。そこでは昭和三十年ごろまでは稲が作られていた。虎市が通夜堂に住んでいたころには、その水田やまわりの畑が耕作され、島の人口も今よりはずっと多かつたから野尾辺や通夜堂あたりにも人がそれなりに行き来して、虎市の暮しもそう寂しい一方ではなかつたのかもしれない。

祖母によると、虎市はもと川内家の三男坊で、明治以前の生まれである。長じて島の打瀬うたせ網の漁師になつた。そのうちに、縁あつて遠く大阪の堺の魚問屋の養子になつて堺で暮した。祖母はカツテの間に落ち着きながら、こんなふうに語つた。

「打瀬網とゆうのは、今はもうないけれど、数人が乗り組んで、大けな帆を張つてな、風
の力で網を引きながら底もののイオやエビを獲るんじや。ほれで打瀬で獲つたものや貝や
を、自分らの船で堺へ運んどつたんじやな。ほうしとるうちに、虎市は堺の魚問屋の主人に
見込まれての。ほれが藤村という家だつた。ほの家の養子になつたんじや。当時は、堺の藤
村とゆうたら、椿泊の森の殿様が船で堺に行くと定宿にしたとゆうくらい、大けな身代の家
だつたんじや。」

ほれで、嫁さんには、淡路の由良の娘をもうての。淡路の由良はやつぱり阿波から船で
大阪や神戸に行くときの途中の港じや。二人は由良で知りおうて、好きおうたらしい。虎市
はトシがいてもすつとした、上品な爺さんじやつた。口が大けかつたが、漁師にしては色が
白うて、ほれにしつかりもんで真面目な人だつたけん、女にも好かれたんだろ。

堺で魚問屋の商売もおぼえ、ゆくゆくは藤村の家を継ぐはずだつたんじやが、間もないう
ちにほの家にせらい子がでけての。せらい子とゆうんは、養子をとつた後、ほれまで子供の
なかつた夫婦にすぐにでける子のことじや。昔はほんなことがようあつた。ほれで、虎市は
ほの後も藤村で働き、子供ももうけたんじやが、だいぶ経つて養い親が死ぬと、自分の勤め
は果たしたとゆうて、家族ともども笹島に戻つてきた。ほれがこの笹島の藤村の始まりじや。
ほなけん、虎市はな、もともと笹島の人じやが、養子に行とつたけん、姓は藤村に変わつ

たんじゃな」

今も藤村姓の家が笹島には数軒あるが、すべてこの虎市からの分かれなのだ。

「島で虎市はふたたび打瀬の漁師に戻ったんじゃが、まあ、堺の藤村からだいぶ分けてもろたもんもあって、島では裕福なほうだった。田んぼや畑も買うて、ようけ子供も生み育てて。この家もな、ほの虎市が建てたんじゃ。もともとこの家を建てる先に、一軒新築したんじゃけん、まんが悪うて、その当時島にあった大火事で焼けてしもた。ほれでな、今度は火事を避けてこの高台の畑を買うてな。器用な人でな、船大工らの仲間を頼んで、船木も利用して、自分らで建てたという。」

ほなけん、虎市も、歳とつてからは胸を病んでしもうてな。ほのころのことじゃ、ええ葉もなし、かかった医者も家で養生せえというばかりで。ほれでお観音さんにすがる気持ちで、通夜堂つやどに住まうようになったとゆう」

虎市は昭和の初めごろまで生きたという。

島から出て遠く堺の本店の養子になったという虎市はどんな男だったのだろうか、また「せらい子」の事情はあったにしても、どうして夫婦してにぎやかな都会暮しを切り上げて寂しい小島に戻ってきたのか、どうして人を避けるように十八年間も通夜堂などに籠ったのだろうか。その心境、といってもそのころの私には想像もつかなかったが、祖母の口から聞いたほぼ百年前のその男の生き方やたずまいはなぜかなつかしい気がした。昔にはよくあったのだろう、天地の定めには謙虚に従いつつ個人としてはよく努めて生きるといった、ふつうの人間のまっとうな、しかも悠然とした生き方をそこに垣間見るように思えた。

「イオは食え、シヨージはせえ」。

すさび書きの粗末な私製系図は、その後異郷で身過ぎ世過ぎに日を送って長年月を過ぎすうちにいつしか紛失してしまい、ほとんどその存在すら忘れていた。それが今度、昨年暮れに亡くなった母親の遺品を整理するうちに、どういわけか漆塗りの箱に入れられた貴重書類の間に折りたたまれてはさまっているのを見つけた。ほぼ四十年ぶりに広げてみると、下手な青インクの文字と、定規は使ったらしいタテヨコの線が一面に踊っている。やや黄ばんではいるが、紙質のせいかさほど古びてはいない。描いた時とこの再会までの間に、語ってくれた祖母たちはとうに死に、これを見た親たちもいなくなった。私は時の移りを思いつつ、昔とはまた少しちがった気持ちでその系図をながめた。

横長の一枚の中央下方には両親の名前が並び、横線で結ばれ、そこから縦線が下に伸びて私と弟の名前が並んでいる。そんなタテヨコの線で表す家族のかたまりは、線でつながりながら上にも横にも斜めにもどんどん広がり、全部でざつと六世代三百人近くの名がにぎやかにしるされている。上下を比べると、昔は子だくさんで、自分たちの世代は子供の数が少ないことなども一目でわかる。どうやら紙面の右半分は父方の係累の、左半分は母方の係累の図になっている。余白にやはり拙い文字で、「海人の系図の背後には海が広がっている。風が渡り、波が立ち、船が動き、潮と魚のにおいがする……」などと他愛ないメモも見える。

そのように紙面は人の名で満ちているのだが、自分が知っている人かどうかという観点からながめだすと、ちがった景色にも見えてきた。父母の世代の列はつまり私のオジ、オバなどで見知った人たちが多く並んでいるのは当然として、その一列上、祖父母の兄弟姉妹になると、もうほとんど顔も浮かばない。現世の明るみからしだいにあの世の闇に移るぐあいだ、そのさらに一列上になると、闇はひたすら濃い。名はゆえ知らぬ墓標の名を見るのと同じく、風景をとまわず、恣意的な記号に変わらない。その名が男名は「一郎」「一吉」「一蔵」「一助」と時代がかって、女名は似たような二文字、三文字のカタカナであるのも記号めいている。八人いる曾祖父曾祖母のうち、私が生前にかろうじて接することができたのはただ一人の曾祖母のみだ。さらにその上の世代となると皆目見当もつかない。

人の寿命を八十年ばかりとすると、はてしなく流れていく時間の中で、個々人はわずかに五世代分だけを生きる存在だともいえよう。祖父母・親・自分・子・孫の五世代。系図も私にとつてはそのあたりが明るだけで、あとは濃淡の闇に覆われている。薄闇のグラデーシヨンの向こうは、濃い闇の世界だ。明るみに比べて闇の領分は絶対的に広く、過去へも未来へも無限である。無限の時空間の中で、自分の知る現世の生者たちの世界はほんのわずかな、移ろいやすい光の帯にすぎないともいえる。

濃い闇の中に虎市の名前もあった。祖母ナミエの夫が庄吉、庄吉の親が亀蔵、その亀蔵の親が虎市である。淡路の由良の人だという連れ合いの名はエイ。「虎市」の文字の横には「堺の藤村家へ養子」とだけメモがある。

母親の死亡によって無人になった田舎の実家を相続することになり、役所への手続きのために必要ということで、十数年前に亡くなった父親の「出生から死亡まで」の戸籍謄本の写しを取り寄せた。実家のある市の役所に申し込んで郵送してもらったのだが、分厚い封書で届くと私はこの歳になって戸籍謄本なるものを初めてしげしげとながめた。父親の「出生から死亡まで」の戸籍は五通もあって、古い戸籍だから昭和五十年代より前の記事はすべて肉筆の、細かい文字でつづられている。読めない箇所や文字もいくらかはあったが、父祖たちのさまざまな事実を初めて知る興味に惹かれて判読していくうちに、何とか父親の曾祖母の親まではたどることができた。

それで、くだんの私製系図に、この戸籍謄本の記事の要点を書き加えてみることにした。かつて二人の祖母からの聞き取りによって作った、ほぼ名前を列ねただけの系図の上に、謄本はいくらか多様な、客観的な知識を与えてくれる。

謄本によって、まず系図の上方の人々の正確な名前や生歿年が知られた。たとえば祖母のおばあさんの一人はムネという人で天保十二年（一八四一）の生まれ、ムネの父は嘉平で文政二年（一八一九）に生まれて明治二十九年（一八九七）に歿し、母はハナで文政八年（一八二五）に生まれ、やはり明治二十九年に歿している。この夫婦は同じ年に死んだわけだが、嘉平は六月二十五日歿、ハナは九月三日歿。あるいは七十七歳の夫嘉平を亡くした七十一歳のハナは、生きる気力を失くして後を追うように亡くなったのかもしれない、などと、役所

の文書の上に勝手な想像も広げる。そうすると、その江戸末期から明治の半ばにかけて笹島に生き死にした父祖たちのたずまいがわずかに見えてくるような気がするのだ。

謄本にはほかに本籍の地番や、養子、婚姻、分家、隠居、死亡場所やそれらの事実の発生の年月日なども記されており、新しい情報やあいまいに浮動していた断片的な知識が関係図や年表に整序され、それらからも推測や想像が立ち上りやすくなった。

あのクジラの背にまたがった「黒市」もいた。田島市蔵というので、こちらは祖父の父であり、弘化三年（一八四六）生まれ、明治四十一年（一九〇八）、六十二歳で歿。その妻はハルで、島内の神谷仙次の次女だ。夫婦は私の祖父を含め三男四女をもうけ、長女に婿をとって家を継がせている。

父親関係の戸籍を調べておもしろく思い、私は母方の戸籍も見てみたくなった。虎市への興味もよみがえった。それで、車を駆って海峡にかかる大橋を二つ渡り、実家のある市の地方法務局支局へ相続関係の書類を提出しに行ったついでに、近くの市役所にも立ち寄って母方の戸籍謄本を申請してみた。昔は市役所の戸籍資料といえれば広いスペースに黒表紙の資料をぎっしりと並べた棚がいくつも並んでいたように覚えているが、今はすべて電子データ化されているらしく、若い女性の職員はこともなげにパソコンの前に坐って短時間ていくつかを取り出し、プリントアウトしてくれた。

また海峡の大橋を二つ渡って自宅に帰ってくると、早速その夜、私製系図や、祖母からの聞き取りをメモしたノートと照らし合わせながら、それらをながめてみた。

虎市の堺の養父の名は、いかめしく藤村源右エ門というのだ。虎市の妻、エイは「兵庫県淡路国由良浦村」の大田又右エ門の次女である。虎市は嘉永四年（一八五二）に生まれ、昭和六年に八十歳で歿している。妻エイは嘉永五年の生まれ。夫婦は五男四女をもうけた。しかし次女は七歳で、五男は七か月で死なせている。それぞれ、明治二十五年（一八九二）と明治三十四年（一九〇一）のこと。明治三十四年にはエイは四十八歳、その年齢くらいまで出産を続けていたことになる。

夫婦の長男の亀蔵は明治七年（一八七四）の出生だから、虎市二十三歳、エイ二十二歳の子である。亀蔵も長じては笹島の漁師になったが、妻のカメノを、笹島ではなく同じ郡内（当寺はまだ市ではなく郡）の農村からもらっている。亀蔵の弟の一人もやはり同郡内の別の農村から嫁を迎えている。そういえば、私の祖母ナミエの実母もまた別の農村から島に嫁入りをしてきた人だ。笹島は四国本土の東方六キロに浮かぶ孤島で、櫓漕ぎの船では本土の最寄りの港まで片道二時間もかかったはずだが、明治大正のころは島と本土の農村は意外に深い交流があったようだ。そのころは農村も漁村と同じように貧しかったし、それぞれの生業においても漁師は農村に出かけて魚介海藻を売り、穀物野菜を買い、農民はまた下肥を漁村から買い付けることもあった。直接的な人的交流が後世よりもさかんで、互いに依存しあつての暮しであったから、双方で嫁取りや婿取りもよく行われたらしい。

亀蔵・カメノ夫婦は四男四女をもうけた。娘の一人は昭和十年に大阪市の男に嫁いでいるが、大阪市でも港区で海の近くということからも、これは祖父虎市の堺の藤村家との関係に

よったのかもしれない。藤村の家は、調べていくと何かと大阪に縁がある。戦前には笹島と大阪はずいぶん遠かったはずだが、昔も今も、海は隔絶するものでなく広い通り道というのが島の漁師の感覚でもある。忍耐強くたくましかった昔の漁師たちは、櫓船で、後には焼玉エンジンの船で、海を自在に行き来しつつネットワークを作っていたのだ。

亀蔵・カメノ夫婦の長男が庄吉で、庄吉に同じ島の岡崎の家から嫁いだのが私の祖母ナミエ。亀蔵は昭和二十五年まで、七十五歳まで生きた。

長男の庄吉は、信心深い祖父虎市の影響もあつたらしく、漁師でなく笹島に唯一ある当所神社の神主になった。藤村の家のオモテの間に大きな祭壇があるのは、そのためだったろう。その部屋の鴨居に掛かっていた古い写真のうち、神主姿の人がこの庄吉だった。

大正十年（一九二一）十一月、十八歳のナミエが庄吉に嫁いだときには、藤村の家は十三人の大所帯だったそうだ。食べ盛りの庄吉の弟妹たちに亀蔵夫婦に亀蔵の弟妹もいた。風呂をたてると、近所からもらいにくる人もあつたので、結局一つの風呂に二十人からが次々に入ったそうだ。その順番はまず戸主の亀蔵、次に跡取りの庄吉で、男から女へと続き、新妻の祖母はいつもしまい風呂だった。そのころはすでに通夜堂に暮していた虎市爺さんがたまに帰ってきてやっぱり風呂を楽しみの一つにしていた。台所のまかないも大変だった。当時はイモが主食のような時代で、藤村の家の広い土間の大きな掘り込み穴には二百貫からのサツマイモを蓄えたという。昭和四十年代くらいまで、笹島の女の辛い仕事の一つは、山の段々畑に天秤棒で水や下肥を運んでイモや野菜を作ることだった。

庄吉・ナミエ夫婦は、結婚の翌年から七年の間に二男二女を立て続けにもうけた。だが長女は三つになったばかりのかわいい盛りに風邪がもとで病没した。色の白い、かわいらしい子だったという。大きな不幸がさらにナミエを襲った。庄吉にはてんかんの持病があつて、それがため昭和五年三月、二十八歳で頓死したのである。ナミエは二十六歳にして三人の幼子をかかえる寡婦になった。翌年の二月には虎市も亡くなっているから、藤村の家はこのころ赤子も次々に生まれたが、葬式もたびたび出したことになる。

そのころは戸主の亀蔵が歳も取って病気がちで、大所帯がまかないかねた。すでに庄吉の弟の一人は島内の他家に養子に入り、一人は学校を終えると遠く北海道の開拓村に雇われていった。いま一人は父の船に乗ったがまだ若かった。一方家事ができる女手は多かった。そこで若くして寡婦となったナミエは、家計を助けまた自分の口を糊するために、夫の三回忌をすませると、実兄を頼り、思い切つて大阪に出稼ぎに行った。しばらく仕事をして何とか生活の目途をつけるといったん島に戻り、まだ四つの次女、つまり今度亡くなった私の母だけを連れてとつて返した。大阪の岸和田に家を借り、昼は機屋で働き、夜は近所の娘たちに和裁を教えた。和裁は娘時代に、本土の農村の母の実家に三年奉公して身につけていたのである。

「ほらほのころは、懸命に働いたよ。ほして生活は切り詰めて、この家に仕送りしたんじや。こんまい息子二人をここに残しとったけん。親子二人、仕事はつろうて生活は苦しかった。時代もようなかつたでえな。気持ちに余裕もなかつた。ほなけん、おまえのお母さんには

だいぶ苦勞をかけたんじゃ。こんまい時からきびしいにしつけてな。あの子、買い物に行たり台所をしたり、こんまいながらによう家事したけん、近所の人によほめられたもんじゃ。まじめで勉強が好きなたけん、とうとう上の学校には行かせてやれなんだ。担任の先生も家まで訪ねて来て女学校を勧めてくれ、本人もよっぽど行きたかつたんじゃけん。どな。ほんな余裕、なかつたもん。ほなけん、ほのことであの子は、今でもウチを恨んどるよ。あの子、学校出てからは、電話の交換士になつたわ」

岸和田での少女時代に辛いことが多かったことは、私は母からも直接聞いている。

不況と戦況悪化のため、昭和十九年の春に祖母と母は岸和田の家を引き払い、笹島に戻つた。母娘二人だけの大阪暮らしは、わが母の四歳から十六歳まで、十二年間ほどだったことになる。

笹島で育つた長男の貞義は大正十一年の生まれ、祖母がもつとも頼りにした好学の青年で、やがて藤村家の大黒柱になるはずだった。しかし兵隊に取られ、昭和十九年の秋、あつけなく戦死してしまつた。「昭和拾九年九月参拾日午後四時参拾分マリヤナ方面ニ於テ戦死」と戸籍謄本にはある。「一回、駐屯地のあつた香川の善通寺に、面会に行つたことがある。おまえのお母さんを連れてな、好物のおはぎを作つて持つていた。面会所でおいしそうに食べとつたのを、今でも昨日のこのように覚えとる。ほれが貞義に会つた最後だったわ」

そう私に語るときも、祖母は涙ぐんだ。祖母の家の鴨居に掛かつていた兵隊服姿の写真はこの貞義で、色白で細面の顔立ちが隣の神主姿の父の庄吉によく似ていた。それにしても祖母はこの時また、苦勞のかいもなく、大事な家族を亡つたのだ。

ナミエの義母で亀蔵の妻、カメノは私の直接知る唯一の曾祖母である。明治八年（一八七五）の生まれだから、私がある心ついたころ、カメノはすでに八十歳の高齢だった。祖母の家に遊びに行くと、ずいぶん老いた小柄なおばあさんがいつもアガリタテの間の玄関に近い隅で目立たず坐つていた。くすんだ色の着物を着て、白髪も少なかった。そばの壁際に布団が畳まれ、衣類などの入つた行李が置かれていた。幼いころの私にはそれが誰だかわからず、ただ皆に従いて「古ばあ」と呼んでいた。耳が遠いうえに眼病をわずらい、目の皮の内側が垂れていつも赤く、うつるので近づくかと子供たちは遠ざけられていた。古ばあの方でも、小さなひ孫たちがそばでさわいでもかよわくほほ笑みながらなめていたりばかりだったが、たまに菓子などは与えてくれたと思う。

かげが薄く、一日中誰と話すでも何をするでもなく、姿が見えないとなればただ悪くした足でそろそろと伝い歩きをして戸外の便所に行つていたので、一步も家の敷地を出ることはないようだった。それでも時々おばあさんが訪ねてきていたのは、この家を出て島の他家に嫁いだ娘たちが母親を見舞いに來ていたのであつたらう。そのおばあさんたちも上り框に腰かけ、たいていは祖母と話していつたようだった。日に三度の食事や茶は祖母が盆に載せて運び、洗濯の世話もしていた。カメノは本土の農村から笹島の藤村の家に嫁ぎ、壮んなころは大家族の家事を切り盛りして八人もの子供たちを育てあげたわけだが、幼い私の目に

映ったのはただ、晩年の、小さくすぼんで、ほとんど家の者にさえ忘れられたように部屋の隅に目立たず起居している、かよわい、孤独な、不思議な姿でしかなかった。

戸籍謄本によると、カメノの故郷は明谷あかたにという梅の名所である。市役所でその謄本を取得する前日、偶然にも私は妻とそこを訪れていた。無人の実家に向かつて車を走らせながら、あちこちに咲き始めた梅を見たので、思いついて明谷の方にまわって見たのだ。まだ少し早かったが、四千本という梅の木が谷の兩岸に紅白の花をほころばせ、香を散らしていた。戸数も少ない、海からはやや内陸に入った、山ふもとの農村だった。カメノの時代は粗末な藁屋根の小家が点在して、さらにひなびていたことだろう。明治二十九年二月二十一日、やはり梅の花のほころびはじめるころ、どんなゆかりで、どんな思いで二十歳のカメノ、「古ばあん」は里を離れ、港まで出、迎えの櫓船にゆられながら遠い笹島の漁師、名も同じ亀蔵のもとに嫁いだのだろうと、謄本の記載を見ながらあらためて想われたことだった。カメノは長生きをして、昭和四十四年、あの藤村の家のアガリタテの間で、九十四歳で亡くなった。私は当時高校生で、島で行われた葬儀にも留守番を任されて行けなかった。

その亀蔵・カメノの親たちが虎市・エイである。エイが淡路の由良浦から、堺の藤村家に養子に入った虎市に嫁いだことは先に書いた。虎市が堺を引き上げて笹島の漁師に戻った時、エイは初めて笹島の人になったことになる。堺のにぎわいはもちろん、当時は大小の船が輻輳したはずの由良の港に比べてもあまりに小さな寂しい島で、エイはだいぶ驚いたのではないだろうか。藤村の家で六人の子供を育て、亀蔵・カメノ夫婦とも同居して、大正八年、六十六歳で歿している。その歿時、カメノは四十三歳、一家の柱としてやはり多くの子供を育てている最中だったが、カメノたちがエイの最後を看取ったのだろう。自宅で亡くなったとしたら、このころすでに観音山の通夜堂で暮していた夫の虎市もかけつけたことだろう。藤村の家のオモテの間の鴨居に掛かっていた、丸鬘の着物姿のおばあさんはこのエイだったような気がする。

祖母ナミエが十八で藤村に嫁いだのはエイの歿後二年たったのことだから、祖母はエイと一つ家に暮したことはなかった。

祖母が子供のころに見たエイは、さすが由良や堺で磨かれただけあって言葉づかいも着こなしも垢抜けた、きれいなやさしい人であったという。だがそのエイについての祖母の一つの記憶は、だいぶ変わっている。中年になってからのことのようにだが、エイは笹島の旧港みしり近くの水尻の浜で、蛇のように泳いだことがあるという。

「ほうよ、ほのエイばあんがな、あるとき、山に畑をしに入った。ほんでテンガで草場を墾りよったところが、まんが悪いことにほこに大けなもんが寝とったんじゃ。蛇じゃ。蛇は眠りを邪魔されたうえにケガさせられたもんじゃから、えろう怒って、目え剥いて赤い舌見せた口から瘴気を吐いたそうじゃ。エイはもうびっくりして、テンガも目籠もうち捨てて家に逃げ帰ったが、ほの晩からたちまちぐあいがおかしうなった。高熱が出て、うわごとを口走って、なんと蛇のかたちそのままに畳の上を這いずり回ったそうじゃ。家の者はもうびっくりして困ったけんど、なすすべもない。ほんでつてを頼って、わざわざ信州から力のある

行者さん呼びよせて、祈祷してもらた。九字を切ったり、いろいろ七日間してもらたそうじゃ。ほしたらな、七日目に、エイはふと蒲団から起き上がって、家を飛び出した。はだしのまま水尻の浜まで走って、ほして着たなりに海に入っていた。ほしてこう、身体を右に左にくねらせて、蛇そっくりのかっこうで泳いだちゅうわ。うちが直接見たわけではないんじゃけん、うちより十も年上の人が、子供のときにそのようすを正目に見たちゅうんじゃ。エイばあんは、ふだんは海や入ったこともない人だったそう。ほの時は、もう若い衆になつとった息子が飛び込んで追いかけて、溺れかけた母親を助けて浜に戻したんじゃと。ほなけん、ほのことがあって以来、憑き物はきれえに落ちたそうじゃ」

泳げないのに、水尻の浜からずんと海に入って、左右に身をくねらせて泳ぎ、皆を驚き呆れさせたエイ。あるいは今なら、神経症ないし更年期の不調や錯乱とみられるようなことだったのかもしれないが、祖母の中では伝説のコードにかかっていた。昔の笹島にいくらもあつた、霊異の話の一つに位置づけられていた。そのように語った祖母自身も、たとえば崖の上から落としてしまった、拾われるはずもない鎌が知らぬ間に納屋に戻って掛かっていたとか、お観音さんに参るたび使いの白蛇が道に沿うて案内してくれるとか、空飛ぶ火の玉がある家の屋根に止まると翌る日その家の爺さんが死んだとか、霊異はいくらも体験している。

エイばあさんの連れ合い、虎市が長い晩年を通夜堂で送ったきつかけも、実は一つの霊夢だったそう。

「持病で苦しんどった虎市が、お観音さんにすがるともりで通夜堂で伽をした時のことじゃ。ふとまどろんだ夢に、お観音さんがおいでくださった。ほして、「虎よ、おまえはずつとここにおつてお寺の世話をせえ、皆の世話をせえ。ほしたら病氣も必ずようなるぞ」とお告げしたとゆう。ほれでじゃ、虎市が家督を息子の亀蔵に譲って、通夜堂で暮しはじめたんは。

何年かするうちに、虎市の病氣はお告げの通り、すつかり治ったそうじゃ。ほれでも爺やんはお観音さんのおかげじゃとゆうて、ほれからも通夜堂に居って、堂守のようなことを続けた。会うと誰彼に、「イオは食え、ショージはせえ」と言いもつてな。

ある年の二月十八日のお観音さんの祭礼の日に、ようけ人が通夜堂に集うて、境内で奉納相撲をとつた。ほれを縁側に坐つて見とる時に、急にま後ろに倒れてな、ほのままだった。戸板に載せて、山越えて、この家まで運ばれてきたんじゃけん、やすらかな顔しとつたよー。皆が、この爺さんはよつぽどお観音さんに縁のある人じゃ、ご祭礼の日に亡くなったんじゃけん、お観音さんに、ええとこに渡してもらたにちがいない、ゆうてな」

昔の笹島に暮した虎市やエイたちの心は、私たちとはちがい、まだ神仏や自然と豊かに交感できたようだ。それはたぶん、日本の、いや世界の至る所で、大昔から続いてきた心性だったろう。

「イオは食え、ショージはせえ」というのは、信心深かったも漁師がその生涯を通じて得た教訓の言葉だったのかもしれない。人は魚を食い、肉を食う。食わないでは生きていけ

ない、働けない。でもただ食うだけでもよくは生きられない。神仏や自然を敬い、欲望を抑えてつつましく、努めて暮せ、と教えたのだろうか。